

思潮社 詩集

常世の時軸

鎌田 東一 著

鎌田東一さんは、不思議な人だ。子どものころ、「鬼」を目撃したり、宇宙に跳ね飛ばされる夢を繰り返し見たりした。30代の半ばには、禪で説くところの「魔境」に迷い込み、精神の危機にも陥った。宗教学者として、神道、仏教、民俗学、日本思想史などを、幅広く研究する一方で、「神道ソングライター」と名乗って自作の歌をうたい続け、「神仏諸宗共働

フリーランス神主」として、新たな祭りづくりなどに、どこもかかわってきた。目指すところは「一人に笑われるリッパな人間」に。なることだという。京大

た宮崎・青島神社のご祭

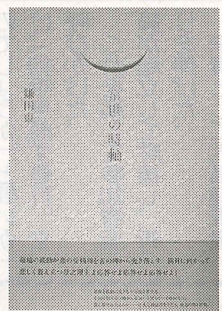
現代の文明、社会の行き

たという。

「古事記や『日本書紀』に記された、常世の国にのみる不老不死の果実だ。果たして、私たち

オウム、酒鬼薔薇に触発された作品も

たといえば、ある作品の冒頭に、救済の果実はもたらされるのか。言霊の詩人は、痛切な祈りとともに、模索を続けているのではないだろうか。



鎌田東一「常世の時軸」思潮社

神が、10歳から読んでいた「古事記」に登場する彦火出見命(山幸彦)であることを知り、神話の世界と現代が結びつく

頭は、こう始まる。へ一色森に一匹の妖怪がいる。それは背中の内分泌腺を刺激して森を徘徊した。この妖怪こそ、麻原彰晃

詩集の最後は、次の句で締められている。〈死後線を 漕ぎ渡り 往け 常世舟〉 (A5判・112頁・価

書評

名誉教授といった肩書の壁を軽々と飛び越えている人である。そうした異能、多才の人が、初の詩集を出した。

奇妙な感覚に襲われた。しばらく経って、突然、噴火のように言葉がほとばしり、次々に詩が生まれてきた。

これまで何千編もの

とくに「Ⅲ」部には、

1995年の阪神・淡路大震災とオウム真理教の地下鉄サリン事件、97年の酒鬼薔薇事件に触発された作品が集められている。災害や事件に直面し、無力だった自らへの自責の念にさいなまれた末に、説教的な警鐘ではなく、子どもたちを含めた同時代人への発信として、詩のことが噴出し

るが、なぜか陰惨な感じはない。むしろ、闇を突き抜けた透明感と明るさがある。それは、鎌田さんが絶望の中にあっても、わずかながら救いの可能性に希望を持っているからかもしれない。詩集のタイトルにもかかわる「トキジクノカクノコノミ(非時香菓)」は、

評Ⅱ 小林 敬和 元読売新聞文化部長